

ワーキングメモリと心配・反すうおよびメタ認知的信念が抑うつに及ぼす影響

Influences of working memory, worry, rumination and metacognitive beliefs on depression

池田 寛人 (Hiroto Ikeda) 指導：根建 金男

問題と目的 メタ認知療法 (metacognitive therapy: MCT; Wells, 2009) では、ネガティブな思考の持続に対して、注意の制御が効かない状態を疾患の原因として考えている。一方、MCTを抑うつに適用した例では、介入導入時の説明を受けた対象者が実際の困難感との乖離を訴えた事例が報告されている。このことから、抑うつでは実際にはどのような認知機能低下があり、どのような困難感が日常で生起しているのか、介入者が理解している必要があると考えられる。抑うつの基礎研究においては、ワーキングメモリ (working memory: WM) 機能の低下が論じられることが多い。WMは短期的な記憶の概念であると同時に、注意制御機能との類似点が多く議論されてきた。本研究では、MCTにおける注意制御機能と、抑うつに特徴的なWM機能を比較検討することで、MCTの文脈において、抑うつの維持に影響する認知機能の検討を目的とする。

研究1：方法 研究1では、抑うつに影響するWM機能を同定することを目的として、質問紙を用いた調査研究を行った。合計で157名分の有効データが取得された (女性92名、不明1名：平均年齢20.48歳, $SD=2.28$)。抑うつの測定に、ベック抑うつ質問票第2版を、心配と反すうの測定に、日本語版Penn-State Worry Questionnaireと反すう型反応尺度を、メタ認知的信念の測定に、日本語版Metacognitive Questionnaire-30と抑うつの反すうに関するネガティブな信念尺度、Positive Belief about Rumination Scale日本語版を用いた。WM機能の測定に、実行機能質問紙を用いた。

研究1：結果と考察 反すうと心配を従属変数として、階層的重回帰分析を行った。心配を従属変数とし、第1ステップでメタ認知的信念を、第2ステップで注意の維持を投入した所、第2ステップでの有意な決定係数の向上が見られた。また、反すうに対して第2ステップで注意の維持と転換を投入した所、有意な決定係数の変化が見られた。注意の維持や、転換は、他の実行機能因子と比較して、刺激に対する反応としての性質が強いと考えられたため、MCTにおける下位処理的な機能であると言える。そのため、抑うつの維持に影響する認知機能は、下位処理的な機能であることが明らかになった。

研究2：方法 研究1の結果から、抑うつの維持に影響するWM機能は、下位処理的な機能であることが考えられた。そこで研究2では、WM内の情報を更新する、あるいは他の処理へと転換する機能と注意制御機能との比較検討を目的とした。更新、あるいは転換の機能測定に、それぞれ課題を用いた実験を行った。実験時には、研究1と同様の尺度に加え、注意制御機能の測定に、能動的注意制御尺度を用いた。結果として、20名 (女性14名、平均年齢21.2歳, $SD=1.2$) の有効データが得られた。

研究2：結果と考察 転換機能とメタ認知的信念、更新機能とメタ認知的信念を独立変数として、心配と反すう、および抑うつを従属変数とした2要因分散分析を行った。結果として、注意制御機能を共変量として共分散分析を行った所、転換機能が反すうに対して有意傾向の主効果を示した (Figure 4)。転換課題では、素早く切り替えることが求められる一方で、状況の変化に応じてその状況に必要な目標を想起することが伴っていたと考えられる。必要な目標を想起する、その状況を吟味するといった機能は、MCTにおける注意制御機能では想定されていないことから、本研究において反すうに影響するWM機能が明らかになったと考えられた。

総合考察 研究1、研究2を通して、抑うつに対するMCTにおいて、WM機能の影響を想定することが、弱いながらも有効性を持つ可能性が示唆された。また、日常場面で反すうから切替を行う際には、その時に求められることは何か、十分に考えてから切替を行うことで、より反すうの低減が促される可能性が示された。

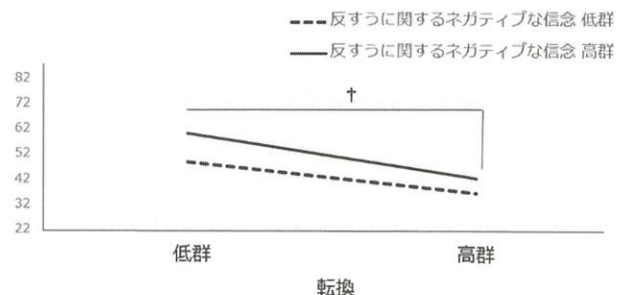


Figure 4. VACSの得点を共変量とした場合の、転換高群と低群における反すう得点 †: $p < .10$